

「弱い教師であること」から出発する集団づくり

—「出会い」と「対話」と「つながり」—

1、私は何をやっているんだろう

私は教員になった時、夢をもっていた。「いい教師」になりたい。子どもたちに慕われる教師になりたい。子どもたちに力をつけたい。素敵なクラスをつくりたい。子どもたちが生き生きするクラスをつくりたい。そう思っていた。でも、現実はそうはいかなかった。

「なぜ悪いことをするんだ。これだけいってもわからないのか。」

「なぜやらないんだ。こんなこともわからないのか。」

私は何とかこちらの世界に子どもたちを引き込もうとしていた。でも、厳しく叱れば叱るほど、子どもたちの心は私から離れていった。逆に子どもたちを受け入れようとすればするほど荒れていった。

「先生がしっかりしないから子どもたちが甘えて荒れるんだ。」

「授業をしっかりやりなさい。授業の力量をつけなさい。」

そう言われているから、ますます自分に自信が持てなかった。自分に自信が持てないから、子どもたちを信頼することもできなかった。いい授業はできない。子どもをしっかりと指導することができない。いい学級もできない。親からは頼りない先生だと思われている。・・・

隣のクラスの掲示板には素敵な子どもたちの絵が飾ってある。研究授業では、子どもたちが挙手をしてどンドン発表をしている。私のクラスのようなトラブルも起こさない。私のクラスと比べるとあまりの違いに落ち込んでしまう。

私は居直って「私は力のない弱い教師」と認める所から出発しようと考えた。そして、私はある先生に相談することにした。相談をすることもプライドが許さずにはできなかった私なのだった。相談して気がついたことがある。それは、私から見て力のある教師だと思っていた人が、けっこう悩んでいることだった。疲れていたり、ぎりぎりでがんばっていることだった。そういえば、夜遅くまで残って仕事をしているのは私だけではなかった。

そして、どうして私はこんなに苦しくて追い詰められているのか教えてもらった。

- (1) 総合的学習の時間、特別支援教育、学力重視など、教育の重点がめまぐるしく変わってきたが、学校現場では課題が全部「足し算」になっていて、教員に大きな負荷がかかっている。
- (2) 社会的な影響を受けながら、子どもや家庭が抱える困難な課題の多くが学校に持ち込まれ、教員に責任が転嫁される傾向がある。
- (3) 人事や処遇とリンクさせようとする個々の教員への**人事考課制度**は、教師集団として求められている実践や「支援ネットワーク」の形成を困難にしている。

これらは、「多忙化問題」として現れ、放課後の職員室は会議・研修・打ち合わせ・事務作業・書類作りといった仕事に忙殺され、明日へのエネルギーを充電することが難しくなっている。子どもの成長や授業で気がついたことなどを同じ学校の教師同士が確かめ合う時間すらなくなっている。

また、**精神疾患で休職した教員**の数が5000人をはるかに超えて、しかも毎年増加している。

○こういったことから、見えてくる教育現場の姿と課題

- (1)新自由主義の教育路線のもとで、課題への対応が教師個人の力量の問題にされる「自己責任論」に晒され、孤立したり攻撃的になっている教師の姿。
- (2)教師が、失敗も含めて自己を出した時に、成長していくプロセスとして受けとめ支援していく職場の必要性。
- (3)子どもを責めるのではなく、子どものなぜを自らに問いながら、発達障害、児童虐待といった視点を含めて、子どもの生活を理解しようとする教師集団の必要性。
- (4)若手教員が、保護者対応で困難を抱え消耗していることに対するチーム支援の必要性。
- (5)学校だけではなく、校外で愚痴を聞いてもらえ相談できるつながりやホッと一息つけたりする居場所の必要性。例えば、学校を超えて「センセの放課後」という集まりをつくり、若手の教師同士が喜びや悩み、葛藤などを語り合う場を作っている実践がある。

2、子どもとの出会い・・・子どもの苦しみと私の苦しみ

「子どもをあるがまま受け入れる」そんなことは私にはムリ。私は子どもの身勝手さにイラついていた。なぜ守らないの？（＝守るのが当然）と、私の苦しさを子どもたちにぶつけていた。私の「学級の物語」は変えずに、そのストーリーに子どもを無理矢理引きずり込もうとしていた。

大震災のとき、「PTSDは、PTSDになっている医師、看護師などには認識できない。そういう人は過小評価する」という話を聞いた。私は医師、看護師を教師に置き換えてみた。私自身が苦しくてゆとりがないから、子どもたちの苦しみを見ることができない。そして、先生の話をしっかり聞きなさいと一方的に言うだけで、子どもたちの話をじっくり聞いたことがないことに気がついた。

よく考えると、大震災と原発過酷事故は、人類的な課題を提起し、私たちの人生観や世界観、生活までも問い直していかねばならないことを求めている。でも、私はそういう問いかけを子どもたちに投げかける心のゆとりも時間もない生活をおくっている。

○子どもとの「出会い」

私と子どもたちは同じだったのだ。同じ苦しみを背負っていたのだ。私も苦しい、だから子どもの苦しさがわかるはずだったのに。そう考えた時、私は初めて子どもたちと出会ったような気がした。4月の出会いからはずいぶん過ぎていたが、「出会い直し」なのだと思うと楽しかった。私の弱さの方から子どもたちを見るという視点は新鮮だった。「～せねばならない」と思っていたから、子どもたちへの話は一方的になり、子どもたちの声は聞こえなかったのだ。

私は授業中にいつもおしゃべりをする子の指導に行き詰っていた。最初、その子に「しずかにしなさい」と注意を繰り返してきた。でも、私語はずっと続いていた。そこで、その場に立たせ「何がわかったか、これからどうするのか、みんなへの謝罪」をさせる「指導」をした。それでも、私語はなくなり、注意をすると強く反発するか、他の子のせいにした。

これでは良くないと考え、クラスでルールを作り、それをチェックさせるようにした。そして「おしゃべりがなくなるまで、授業を進めません。」と宣言し、周りの子に注意をさせるようにした。しかし、他の子と言い合いになり静かにはならなかった。

全体での指導はこれ以上は良くないと思ったので、個別に呼んで語るように指導した。彼は、「授業

中ひまだ。なにかやることがあれば、しゃべらない。」と語った。たったそれだけだったけれど、やっと、彼との対話が始まった。彼がおしゃべりをするようになったのは何時からだったのだろう、誰とどんなきっかけで、どうやってしているのだろう。私はこの子の事をほとんど知らないことに気がついた。そこで、周りの子たちにも聞いてみた。いろいろなことがわかってきた・・・。

○子どものおかれている状況・・・子どもからのSOS

- (1)子どもたちが、大人と同じレベルの不安やストレスに晒されているために、とても耐えることができなくて、キレやすい状況にあるのではないか。父親から捨てられたり暴力を受けるのではないかと、いった母親の感じる不安を、一緒により強く感じたり、実際に虐待を受けている子が増えている。
- (2)家族内のストレスが、一番弱者である子どもに向けられることが多くなっているのではないか。保護者から「アホ、バカ」だけではなく、本心ではないにしても「生まない方がよかった」といった全面否定の言動を受けて悲しい思いをしている子どもがいる。
- (3)学校が、規範や学力など、「あるべき姿」に基づく比較と競争のルールを敷くことによって、不安やストレスを抱えた子どもを追い詰め、子どもの抱える葛藤とのズレが生じているのではないか。
- (4)多様な子どもの生活課題や学習課題を前にして、多忙とバッシングに晒されながら、教師が疲弊し子どもの話を受容・共感的に聴こうとするだけの保水力が枯渇してきているのではないか。「アホ、よるな、シネ」といった暴言を毎日聞かされて傷つかない教師はいない。子どもの言動の意味を集団で問う支援ネットワークがなければ、一人ではとても身が持たない。
- (5)このような困難な状況にあっても、子どもが保護者や教師に求めていることは、「自分のことを認めてほしい」という願いではないか。子どものことを認めるとは、能力・発達レベルで「ほめる、頼る、励ます」こと。存在レベルで「ねぎらう、赦す、守る」こと。

(1)のことは、私のことを言っているように思う。(5)の人から認められたいと願っているのは、私も同じだ。とすると、こういう子どもの状況は私にも置き換えられ、つまり私が教師としてどう成長していけばいいのかという道筋も示している。

それにしても一人で背負い込むには重過ぎる。「支援ネットワーク」ってどうやってつくればいいのか。どうやったら子どもの言動の意味を探っていけるのだろうか。

3、「つながり」をつくりだすために

子どもに「よるな。あっちへ行け」と言われた。この子とどうつながっていったらいいのだろうか。それにしても、どうしてこんなに荒れるのだろうか。一旦キレたらどうにもならない。子どもとつながるためにはどうしたらいいのだろうか。子どもの方からつながりを切っているような感じがする。そんな子どもとどうやって「つながり」をつくれればいいのか。

私たちは、「つながり」の中で生きている。でも、周りを見ていると、「つながり」が切れていると感じることが多くなってきている。私たちの「つながっているという感覚」はどうやって生まれてくるのだろうか。「キレる子」は、本当に「つながり」を切ろうとしているのだろうか。

- 子どもたちは、どんな体験や人間関係を経て、保護者、教師、友だち、自分自身と「つながっている」と実感していくのか？

(1)乳幼児期に、身体的かかわりを含めて保護者との関係でたつぷりと受けとめられる体験を重ねること。抱きしめてもらったりするなかから、人間への基本的な信頼感が育まれる。子どもは、甘えたりわがままを言っても見捨てられないという安心感が土台にあるときに、時には叱られることがあっても絶望はしない。「アホ、シネ」などと叫ぶ子の心には、自身の存在への不安が渦巻いている。

(2)学童期において遊ぶことと働くことなど、楽しいことややりがいのあることを友だちと一緒に体験すること。遊びを通して同世代とつながり、他者のために働き一肌脱ぐことを通して、子どもたちは大人や社会と出会う。他者のために役立つ体験からあてにされることの心地よさを実感し、自分に対する誇りも芽生えてくる。このように友だちや大人と関わりながら、失敗付きの練習ができて排除されないという日常の生活体験を重ねることによって、生きて働くスキルが身についていく。

(3)思春期において、負の感情や体験、葛藤を出せて共有し合える人間関係をつくっていくこと。

自己の解体、再編が課題となり、誰もが多かれ少なかれ思春期葛藤を抱えるこの時期に、上手にSOSを求める力を育てていくこと。自分が本当にしんどい時に受けとめてもらえるような友だちや大人との出会いは、共存的他者となって心の中に住み着いてくれる。だから安心して自分と向き合いながら、人生の主人公へと脱皮していくことができる。

(4)どの時期の子どもにも共通して、「聴く」というかかわりの大切さ。

①感情を聴き取ること。聴き取ってもらうことで、感情に一区切りをつけたり、冷静に課題に向き合っていくきっかけになる。

②途中で否定せずに聴くこと。途中で「でもね」と言わない。それによって相手の存在に対して敬意を払うという姿勢が伝わる。

③一緒に悩み考えながら聴くこと。聴くことは、葛藤の言語化を援助することだが、解決請負人になることではない。

④言語化を急がないこと。子どもたちは、本当につらい時や不安が高い時には、うまく言葉で表現できない。このときには、様子を見ながら黙って寄り添うこと。

⑤限界をわきまえて聴くこと。一人で抱え込まないこと。わからないときや迷った時には、同僚や専門機関に相談すること。そこから「支援ネットワーク」ができる。

⑥「今まで大変だったね。」という姿勢で接すること。

(5)時には言葉を超えて、涙でつながっていくという関わり方もある。悲しみを抱えながら生きている人々の姿に触れたとき、友だちのつらかったり嬉しかったりした気持ちが自分の気持ちと重なったとき、言葉よりも先に涙が出てしまう。感動の体験。

○「つながり」をつくりだす「対話」とは

子どもとの「対話」は「問い」から始まる。気になる子に、「どうしたんや」と問いかけることから実践が始まる。(私の対話は「問い詰め」から始まっていた。「何でそんなことをやったんや」と言われても、それがわかればこんなことしていないし。この先生はボクのこと何もわかってくれないと思うだろう。決して問い詰めてはならない。)

ところで、子どもは言葉だけで応答をするだけではない。そういったとき、私たちは子どもの言動の意味を「自らに問う」。そして、その意味がわからない時は、「まわりの同僚などと、子どもの言動の意味を問い合う」。(私は一人で抱え込んでしまっていた。その子の問題、私との「個別の問題」だと思っ

てしまっていたからだ。)

また、話を聴いている時に、子どもが負の感情をぶつけることある。「ムカつく、ウザい、つらい、

悲しい」といった感情を聞き取り、理解しようとしてくれる姿勢の他者（教師）と出会うことで、子どもは情緒的に安定し、安心して課題に向き合い、課題を相対化することができる。（私はしっかりと受けとめずに「でもね・・・」と説得し、子どもの感情を否定してしまっていた。）

そして、教師の「語り」は、「教師自身を語る」こと。子どもと同じ時期に、どんな失敗をしてきたのか。それをどうしのいで現在に至ったのかなどをリアルに語ること。教師も一人の人間として、自分自身の生き方を語ること、自分自身の哲学を語ること。「何を大切に生きてきたのか」「何のために生きていくのか」そういったことを語ることで互いのコミュニケーション能力も育っていく。（今私は、何を大切に、何のために、どう生きていけばいいのか。）

4、トラブル（子どもの問題行動）は教材

ートラブルを子どもといっしょに読み開き、新たな「つながり」と「物語」をつくりだすー

「トラブルを起こさせない」ことは私には無理だ。いや、子どもたちはトラブルを通して心の中（世界の矛盾）を表現している。そう思ったら、トラブルはとても大切な教材に思えてくる。

ただ、そのトラブルをどう読み解くのか。この子は一体何を言おうとしているのだろうか。それはどんな意味があるのだろうか。このことについて、今年の岐生研の学習会でこんなことを学んだ。

○東海北陸地区セミナー「安田実践」のレポート分析「発達要求を発達課題へ」より

市村は、自分で意図していない事件を数々起こしてしまう子です。「草に火をつけたら、どうなるんだろう。」という興味半分で行ったら、大騒ぎになった。「自分が万引きするわけじゃないから」というつもりで見張りを引き受けたら、見つかって一緒に叱られた。「泳げないやつも、水を怖がらなくしたい。」というつもりで行ったら、大ごとになってしまった。

市村自身が思っていたのではないのでしょうか。「どうして、やることなすこと裏目に出るんだ！」「自分の意図したように、どうして結果がついてこないんだ！」そんないらいらがふてくされという表現を取っていたのではないかと今は思えます。

「寂しさをわかって欲しい、自分を認めて欲しい、やってしまう自分を何とかしたい、できない自分も受け入れて欲しい、家族の中に居場所が欲しい・・・等。」

という皆さんの分析も的外れではない、と思います。でも「自分を認めてほしい」のはどんな自分なのか、「できない自分」とはどんな自分なのか、を突き詰めてみると、「見通しが持てない自分」に行きつくように思います。もちろん「さびしさ」もあります。

小室さんは、「発達要求とは、掘り起こすもの」という表現をされました。「見通しが持てるようになりたい」という要求はひょっとすると市村の意識にはまだ上っていないかもしれません。であるならば、どのような手立てで気づかせていき、ともに取り組む仲間を作るのが問われているのだなあ、と思いました。

この学習会で、私たちは「子どもとの対話を通して子どもの発達要求を掘り起こすこと」を学んだ。安田さんの実践では、対話が全ての活動を通じてなされ、「読み開き」が市村本人の自覚していない所まで及んでいることがわかる。本人は言葉に出せなかっただけで、その要求を行動で示していたのだ。その声を「読み開く」ことが教師の仕事なのだ。

そして、市村の言動の意味を自らに問う安田さんと、多くの教師が安田さんと一緒に討論をしながら

その意味を読み開いていく姿は、現在の学校現場の状況に一筋の光を与えるものだと感じた。これが「支援ネットワーク」の一つのモデルなのだ。岐生研のサークルの追求すべき大切な課題である。

○子どもたちの「つながり」をつくりだす・・・この子の問題は私たちの問題

トラブルが起きた時に、それはその子個人の問題ととらえてしまうと、トラブルを「学級の物語」にすることはできない。市村の課題は、彼一人の課題ではない。彼のトラブルはみんなの問題なのだ。

でも、どうやったらクラスみんなの問題や課題にできるのだろうか？

河田さんが、フィリピンから分析してきた内容は、この点を深く追求している。

そこから考えれば、市村の要求実現は、集団側が達成すべき課題になるものです。つまり、市村の要求は、それが発達課題だと集団側に認識されることによって達成されていくものなのです。

では、集団側は、どのようにして市村の要求と発達課題を認識するのでしょうか。それは、「自分も同じだ」という共感からです。「先を見通さずに、ついその場のやりたいことを優先して失敗することは、私にも誰にでもある」という共感です。人が他者を受け入れるのは、他者の中に自分と同じものを感じるからでしょう。それがないと、他者を理解できません。そういう距離を置いた付き合い方もありますが、市村の場合、欲しいのは居場所ですから共感が必要です。

その点からレポートにもどって考察すると、太郎が集団に受け入れられているのは、太郎のことを理解する集団がそこにあるという読み開きが大切になります。そこから、「では、この学級は、みんなのことを受け入れているのでしょうか」という課題に向き合わせる。

そして、市村が引き起こしてきた事件の読み開きを行い、市村の行動の失敗が「自分の中にもある先の見通しの無さによるもの」が引き起こしていることに気付かせていくことにあったのではないのでしょうか。

ここには、国語の「太郎こおろぎ」の教材の読み取りから、市村の課題をクラス全体の課題にするという道筋が示されていた。市村がしてしまうことは自分にもある、私も市村と同じだという読み取りは、「トラブルから学ぶ」重要な視点を与えてくれる。

市村のトラブルが学級の課題になり、それをみんなで取り組んだ時に「学級の物語」が生まれる。私たちは、これを「集団づくり」と言ってきたのではないか。人と人との「つながり」を作っていくことこそが「集団づくり」なのだ。そして、このことは現代の様々な問題を、私の問題だとしてとらえることができる大きな視点が含まれている。そこから「つながり」が生まれてくるという視点が。

例えば、原発の問題は全ての人が当事者なのだ。私の問題なのだ。

5、今必要なことは、どう生きていったらいいのか考えること

子どもたちに質問をしなさいと言っていた私は、質問をしていたのだろうか。自分を強者の側に置いていたから、プライドが邪魔をして聞けなかったのではないか。そもそも、人間は元々弱い存在なのだ。

自分を「強者」の側だと考えていたそれまでの私を、変えるきっかけとなったことがあった。それは、昨年度の「教育のつどい」での北村年子さんの講演であった。

○ 社会を振り返る・・・「強さ」と「弱さ」

それだけ、少年たちと同じように自尊感情をもてない大人がたくさんいるということですよ。攻撃はしないけれども、認めている。まさに、教室で起こっている「いじめ」と同じ構造が、社会でおきている。(A) そうと気がつかず、社会はいじめをした少年たちだけを悪者にしてしまっている。

恥ずかしいことに私は、「ホームレス襲撃」の事件を聞く時に、「ホームレスだから襲われてしまうんだ」と、襲われてしまうことを認めているかのような感じを持ててしまいます。「襲われていい訳はない」という理性的な感情はもちろんありますが。

でも、私は自尊感情が高くはない自己認識があるので、ホームレスを襲撃する少年たちが抱く(B)「自分自身が認められないことを、認められてしまっているように見えるホームレスの人たちを攻撃したくなる潜在意識」を私もどこかで持っているのだと思うと、危ないなあと思うわけです。子どもの頃には教室でのいじめには対抗し、今でも職場でのいじめには対抗していると思っていますが、社会では、いじめを認めてしまうような脆弱さをもっているんだなと思うわけです。

(C)「強くなる」にはどうしたらいいんでしょうか。

(A) そうと気がつかず、社会は、いじめをした少年たちだけを悪者にしてしまっている。

この事件だけではなく、TVを見ても新聞を見てもマスメディアは加害者を徹底的に暴き、悪者にしたてあげています。「A3」という森達也の著作を読んだら、このことがオウム事件を境に日本全体を覆うようになってきたと書いてありました。自分が排除されないために、悪者(誰か)を排除するという傾向は、弱者や異質なものを排除していこうとする傾向を生み出していると感じます。

(B)「自分自身が認められないことを、認められてしまっているように見えるホームレスの人たちを攻撃したくなる潜在意識」

さらに、私たちや子どもたちもこの影響を受けているようです。ある知事などは徹底的な厳罰を与えるという、被害者心情を前提にした憲法無視の施策を打ち出しています。それが人気の元になっています。ビラを入れただけで逮捕された事件や、裁判が始まっていないのに、逮捕されただけですでに犯人扱いをされるなど、マスメディアも「攻撃対象」を作り出し冤罪を生み出しています。

「ワーキングプア問題」の時も、既得権益を受けている層を攻撃するということがありました。保護政策を攻撃し社会的弱者をますます追い込んでいく傾向が見えます。

貴方が言われるように、私たち自身がそういった弱さを持っています。いじめをしている子も攻撃している人も私も、同じ弱さをもっているのです。ですから、それを自覚することが、次に踏み出す第一歩のような気がします。

(C)「強くなる」にはどうしたらいいんでしょうか。

「強くなる」ことがこの状態を生み出しているわけですから、本当の意味で「強くなる」には、硬さではなく柔らかさの方が必要な気がします。もっと言えば弱さを自覚した「強さ」。使い古されているかもしれませんが、譬えれば「無知の知」。

自分が無知であることを自覚したり、自分が弱さを持っていることを知っている人は、対策を立てます。その対策は、その弱点を前提にした対策だからかなり強力ではないかと思います。自分のダメさを克服するのではなく、ダメさを前提にしてより良く生きる工夫をする知恵が必要なのでしょう。

いや、知恵がなくても、よりよく生きることが出来る集団(つながり)をつくるのがもっと大切なことです。今求められている「強さ」とはこのようなモノではないでしょうか。

○「問いかけ」から「つながり」をつくりだし希望を生み出す

ますます多忙になり、作業をこなすだけになってゆく教師の仕事。その中で、展望を持ち自分を失わずに教育の仕事をしていくためには、自分の哲学（ビジョン）を持つことが必要となる。この哲学（ビジョン）がないと、様々な教育技術も本当に役立てることができない。哲学（ビジョン）のない技術がどのような悲惨な結果をもたらしているのかを、私たちは目の当たりにしている。

ただ、哲学（ビジョン）と言うと難しいと思うかもしれないけれど、それは「問い」から始まる。

「なぜそろえなければいけないの？」

「学力をつけるというけれど、そもそも学力って何？」

「なぜ100マス計算や、ドリルを何回もやらせるの？」

「これで、自分で考え自主的に行動できる子どもが育つの？」

「これで、これからの困難な世界の課題を切り開く力を子どもたちに育てることができるの？」

.....

こういった問いを自分自身にも周りの教師にも（時には子どもにも）投げかけながら、教師自らが現代を生きていく哲学（希望）を、「つながり」の中でお互いに検討しながら持ち合っていくことが、この困難な学校現場で展望を持って生き抜いていくことになり、また子どもたちとの「つながり」は、私たちに楽しさと希望を与えてくれるのではないだろうか。

○まとめると、

- ・ 異質な他者との「出会い」から「対話」が始まる。（対話のスタンスや技術を大事にしよう。）
- ・ この「対話」は、私たちの既成の子ども観、教育観を揺さぶる。
- ・ これを一人で背負いこまず、「支援ネットワーク」（サークル）で相談しながら読み開く。
- ・ 子どもたちや教師とトラブルの「読み開き」をすることによって、子どもの現実や課題を発見する。
- ・ 自分たちの現実や課題を子どもたちが自覚し、未来を切り開く希望の種を見つける。
- ・ そこから新たな「つながり」が生まれる。（「つながり」をつくりだすことが集団づくり）
- ・ 「つながり」は、世界を意味づけて、新たな「物語」を語り始める。

子どもは、安心感を土台にし、トラブルを通して仲間の中で生きていく「ちから」を身につけていくものであり、この「つながり」と「物語」こそ、子どもたちだけでなく私たち教師（大人）も必要としているものなのだ。

文責 上村文隆

【参考文献】

- ・ 生活指導誌 2011年8月号 p.42～49 春日井論文
「お互いにつながって生きる」ための支援ネットワーク
- ・ 生活指導研究 No.28 春日井敏之氏の論文
「学校教育の現状と生活指導の課題」 —教師の専門性を問い直す—